

Title	ティリッヒとメイ：不安の本質の探究
Author(s)	今井, 尚生
Citation	ティリッヒ研究 (2007), 11: 21-35
Issue Date	2007-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/57653">https://doi.org/10.14989/57653</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## ティリッヒとメイ

### 不安の本質の探究

今井尚生

### はじめに

この小論考は、ティリッヒとメイの思想を比較検討しながら、不安の概念について考察することを目的とするものである。ロロ・メイ（Rollo May：1909-1994）とティリッヒの間に親交があったことは周知のことである。大学を卒業してギリシアに渡ったメイは、アメリカに帰国後、ユニオン神学校に入学、そこで教鞭をとっていたティリッヒと出会うことになる。「メイは、ユニオン神学校の最初のクラスで彼が一番面白い顔をしていると思った人物であり、やがてティリッヒの家の親しい友人となった」（Pauck, 1976, p.270）。また、メイがティリッヒにとって重要な存在であったことは、1962年にティリッヒが引退する際、ハーバード大学神学部の教授たちがティリッヒのために催したお別れの夕食会で、メイが演説者の一人であったこと（*ibid.*, p.326）、1964年にニューヨークの神聖ヨハネ大聖堂でティリッヒを称えるコロキウムが催された際、3名の発表者の中にメイがいたことなどから容易に知られる（*ibid.*, p.270）。また、学問的な影響関係も否定できない。パウクはメイについて「とくにその仕事には、ティリッヒの影響がはっきりと認められる」（*ibid.*）としている。そして学問的影響関係は、師であったティリッヒからメイへという方向だけではなく、むしろ相互的であったと考えられる。パウクはティリッヒの心理学に対する関心およびメイとの交友を次のように語っている。「1950年代になると、アメリカでは実存的心理分析（現存在分析）が脚光を浴び、キルケゴールの不安の概念やフロイトの『リビドー』（根源的欲求）の概念が見直されるようになった。長い間育てて来たフロイトへの関心が甦り、ティリッヒの関心は社会主義から魂の癒しへと移行し、カレン＝ホーナイ、エーリッヒ＝フロム、ロロ＝メイと親交を結んだ」（*ibid.*, p.6）。

この論文は、ティリッヒとメイの思想的影響関係を歴史的な観点から明らかにしようとするものではない。むしろ彼らの思想の間に親近性があることを前提とした上で、そして事実、両者の思想の近さは本論文において取り上げる彼らの思想内容からも明らかであるが、彼らの思想を相互に比較、補完することで、不安の概念についてより深い理解を得ようとするもの

であり、それと同時に両者の思考法の異同を分析することである。<sup>(1)</sup> 一方のメイは主に心理学的に考察を進めているが、この問題が哲学的、文化論的な広がりを持つことをよく理解しており、他方のティリッヒは主に存在論的に考察を進めているが、不安の問題に関する心理学の現状がどのようなものであるかについて深く認識している。

これまでのティリッヒ研究の中でも、心理学と彼の思想の関係は研究がなされてきた。本論で取り上げるメイの『不安の意味』は彼が 1949 年に取得した博士論文を基にしたものであるが、その前書きの中で、メイはティリッヒ他数人の名を挙げて、「種々の段階で原稿を読み、多くの刺激的な時間を通して、彼らが代表する分野において不安の問題を議論してくれた」(May, 1950, p.xi)として彼らに感謝の意を表している。メイのこの証言および、ここで比較検討の対象とするティリッヒの『生きる勇氣』(Tillich, 1952)の出版年がメイの著書のそれに近いことを考え併せると、両テキストは、当時の両者の思想的交流を反映したものとして、その比較研究には一定の意味があるものと考えられる。<sup>(2)</sup>

## 1 不安と恐怖

### 不安と恐怖の精神身体的相違

まず、不安(anxiety)と恐怖(fear)との精神身体的な相違に関する議論を整理するところから始めたい。感情と胃腸の活動との間に相関関係があるということに対する認識は、近代的な学問の出現を待たずともなく、我々の言語の中に古くから刻み込まれている。英語の「がまんできない(not being able to stomach)」、「うんざりする(being fed up)」という慣用表現にそのことは表れているし(May, 1950, p.81) 日本語にも「腹が立つ」、「腹に据えかねる」などの言い方がある。そして実際、不安と恐怖の相違には精神身体的な(psychosomatic)根拠が認められる。

この点に関して、メイはトムの事例を挙げている(ibid., p.83ff.)。アイルランド系の 57 歳の男性であるトムは、9歳のときに煮立ったスープを飲んだことにより食道が閉じてしまった。腹部から胃に貫通する穴を開ける手術を受け、その後約 50 年にわたって瘻管を通して栄養を摂取していた。以前、彼は政府からの援助を受けていたが、感情と胃の活動との関係の研究に関する被験者になることで研究所に雇われ、同時に研究室の整理係という役目も与えられていた。彼は感情的に不安定で、恐怖、不安、悲しみ(sadness)、怒り(anger)、憤り(resentment)などの感情の間を終始揺れ動いており、これらの感情と胃の活動との関係が、胃に開けられた穴を通して観察された。彼の事例を通して、恐怖と不安では胃の活動が正反対になることが認められた。

恐怖のとき、トムは胃の活動は著しく減退した。彼の胃が人為的に活性化された状態にコントロールされていたある日、トムのいた研究室にスタッフの一人である医師がひどい剣幕で入ってきた。その医師の大切な書類が見当たらなくなっていたからである。実は、前日の午後、研究室の整理をしていたトムが、そのスタッフの書類を置き違えてしまっていたのである。医師がぶつぶつと文句を言いながら、引き出しや書棚を探し回り、漸く書類を探し当て、最終的に研究室から出て行くまでの5分間、自らのミスであることの発覚を恐れたトムは、恐怖のあまり、黙り込み、身動きもせず、顔は青ざめていた。この間、彼の胃の粘膜は白くなり、元の状態に戻ったのは、その医師が部屋から出て行った後であった。(因みに、胃の機能低下に結びつく他の感情は、悲しみ (sadness)、落胆 (discouragement)、自責の念 (self-reproach) であった。)

逆に不安の時、トムは胃の活動は活性化された。彼は研究所に職を得て、以前より生活水準が上がったことに満足していた。彼には妻があったため、それは単に収入が増えたということだけではなく、自分が家族を養っていているという自らの存在意義を確認するためにも重要なことであった。「もし私が家族を養えないようなら、すぐにも埠頭から身を投げてしまうだろう」とトムは言っていた。その彼が、この研究所からの収入をどのくらいの期間に亘って期待することができるのかについて不安を抱いていたとき、彼の胃の活動は活性化していた。彼が今の職に就いていられる期間について責任者に尋ねようと決心した前の晩は、どのような返答がもらえるか心配になり、妻ともども眠れなかったという。そして翌朝、彼の胃の活性度を示す数値は被験期間中の最高値に達した。(胃の機能の活性化と結びつく他の感情は、不安と結びついた複合的な葛藤感情 (the complex conflicting feelings)、敵意 (hostility)、憤慨 (resentment) であった。)このように、恐怖と不安を区別することには精神身体的な根拠があると言うことができる。それでは、両者の身体的な現象面を超えて、より本質的な相違は如何に理解されるであろうか。

### メイによる防衛システムの譬

恐怖と不安の反応の相違は、パーソナリティーの異なった心理学的レベルで起こっているという事実に基づいている (ibid., p.223ff.)。このことを明らかにするために、まず恐怖と不安の違いについてメイが用いている軍隊の類比に注目したい。前線における部分的な戦いは、恐怖による特定の脅かしに警えることができる。戦いが局所的で、周辺 (periphery) において行われている限り、本拠地が脅かされることはない。しかし敵が一国の首都になだれ込み、内部の通信網が破壊されると、戦闘はもはや局所的ではなくなる。敵があらゆる方向から攻めてくると、兵士達はどちらに進撃すべきか、どこで抵抗すべきかがわからず、打ちのめされて混乱

状態に陥る。後者が不安による脅かしを表している。恐怖とは、仮令それが大きな脅かしであろうとも、既に構築された防衛システムを用いてその特定の脅かしに対処できている状態である。ところが不安の場合は、この防衛システムそれ自体が打撃を受け、脅かしに対して抵抗する術もなく、混乱に陥っている状態である。即ち、恐怖の場合、脅かしは周身的であるのに対し、不安においてはシステムの核となる一段と深い部分に打撃が与えられていることになる。通常、不安は“diffuse”、“vague”、“undifferentiated”などの言葉で特徴付けられ、確かにその強度において、恐怖より弱いようにも見える。しかし、これらの言葉は不安によって脅かされているもののレベルが、恐怖の場合とは異なることを意味しているのであって、むしろ不安の方が、深刻さの度合いは大きい。

## 2 不安と葛藤

### 不安の基にある葛藤の心理学的説明

それでは不安において脅かされているもの、先の譬えにおける防衛システムにあたるものは何か。メイとティリッヒの議論に基づく、これについて、一方では心理学的次元から、他方では文化論的次元から光を当てることができる。まず、メイの心理学的議論によれば、防衛システムに相当するものは、人格の核 (core) であって、それは心理学的構造の基礎としての、人格の安全装置 (security pattern) である。メイはそれを対象世界 (the world of object) と異なるものとしての自己 (self) の認識であるとしている。即ち、人間は「自己 - 対象」構造を構築し、自らを脅かすものを対象として認識することによって、それに対処するというパターンを発展させていると理解できる。脅かしに対する反応はこの安全装置に基づいて可能となるが、それが恐怖であり、この安全装置それ自体が脅かされることが不安なのである。「不安はパーソナリティーの基盤を襲うので、個人はその脅かしの外に立つことができず、その脅かしを客観化することも出来ない。それ故、個人は不安の脅かしに遭遇して、それに対処するには無力である」( *ibid.*, p.206 )。このように不安は人間存在の本質的な安全を脅かすと言う事実から、不安経験は「宇宙的」経験として記述されることがある ( *ibid.*, p.207 )。

それでは、このような不安が生じる原因は何か。メイは強い不安の基には葛藤があることを指摘し、内的な葛藤の存在を発達心理学的な観点から説明している。ここでブラウンの症例を見てみたい ( *ibid.*, p.246ff. )。32歳の男性であるブラウンは9年間、ひどい不安状態に悩まされ続けてきた。彼は学業優秀であったが、医学校へ通うようになり、与えられた課題に直面するようになってから、無力感や頼りなさを感じるようになり、小さなことを決断することにも困難を覚え、不眠に悩まされるようになった。

メイは、ブラウンの不安は母親に対するきわめて依存的で、共生的関係から生じたものであり、その関係には特徴的な葛藤が認められるという。彼は誕生以来、支配的で、サド・マゾヒズム的な母親と付き合っただけでなければならなかったという状況の中で、共生関係が育てられてきた。そのため、自分自身の自律性を達成し、自分の力を利用したいという本人自身の欲求があるにも拘らず、他方では、もし自分自身の力を自分で使うことにでもなれば、母親の手で恐ろしい脅かし（殺されるという脅かし）にさらされるという考えに囚われるようになった。即ち、一方で自律を達成したいという欲求と、他方で母親の支配から逃れられずまたその庇護の下でしか生きられないという考え、これら両者の葛藤である。

不安と葛藤の関係は次の二通りに整理されよう。一方で、深刻な葛藤状態が長く続くと心理学的基盤が脅かされることにより不安を生ずるようになる。他方で、発達心理学的な観点からは、母子関係などが重要である子供時代において葛藤状態の中で生きることを余儀なくされた個人は、心理学的基盤を健全に発達させることが出来ず、成長した後でも、葛藤を呼び起こすような偶然的出来事が引き金となって、神経症的不安を生ずるのである。

### 不安の基にある葛藤の文化論的解釈

先にメイが取り上げたのは、個人の内的な葛藤であるが、不安を生じさせるのは、個人の発達段階において心的に形成された葛藤のみではない。人が一つの行動を決断することの出来ない袋小路に追い詰められるのは、行動を規定するために内在化された諸価値間に深刻な矛盾が存在する場合であり、その場合はそれら諸価値の文化的背景が理解される必要がある。そこで、メイの譬えに挙げられていた防衛システムは文化論的には如何に解釈されるか、という問題に移りたい。この問題を考察するために、ティリッヒの不安の類型論を取り上げる。

ティリッヒは不安について次の三類型を挙げている（Tillich, 1952, p.159ff.）。第一は、人間存在の存在的自己肯定に対する無の脅かしを自覚することとしての不安、即ち運命と死の不安（存在的不安）である。第二は、人間存在の精神的自己肯定に対する無の脅かしを自覚することとしての不安、即ち空虚と無意味の不安（精神的不安）である。そして第三は、人間存在の倫理的自己肯定に対する無の脅かしを自覚することとしての不安、即ち罪責と断罪の不安（倫理的不安）である。ティリッヒは、これら不安の三類型の区別の妥当性が西欧文明の歴史解釈によって裏付けられるとしている。そして彼の解釈において重要なことは、それぞれの不安の類型が優勢的に現われるのは一つの文明の末期であるとして、ある時代において統一的に機能していたシステムが揺らぐ時、それに対応した不安の類型が現われるということを描き出している点である。即ち、古代文明の末期には存在的不安が、中世末期においては倫理的不安が、そして近代末期には精神的不安が優勢的に現れているということである。ここでは第三の倫理的

不安を取り上げて、この点を確認してみたい。

人間が本質的に有限的自由であるということは、人間がその自由の限界内において、彼がなすべきところのものになるよう求められているということである (ibid., p.165)。なすべきところのものの現実化へ向けて行為することが善であり、善を行うことにおいて彼は自己を肯定することができる。しかしティリッヒは最善と思える行為のなかにも、無が顔を出しているという。それは即ち、どのような善と思える行為においても、悪が分かちがたく結びついており、善と悪との深刻な曖昧さが人間のあらゆる行為の中に浸透しているということである。この曖昧性の自覚が罪責の感情として不安をもたらし、最終的には断罪されているという感情へと駆り立てる。このような最終的な状況を回避すべく、人はしばしば道徳的厳格さとそれによる自己満足へと至る道を選ぶ。即ち、道徳的であると見做されている行為を行うことによる自己肯定である。

倫理的自己肯定と精神的自己肯定は区別されるべきであるが、それらは分かちがたく結びついている。ティリッヒは、精神的自己肯定が力を失ったときでも「倫理的人格の自己肯定は、それによって意味が発見されうる一つの道となるのである。たとい単純な義務の自覚であっても、その人を空虚から救うことができる」(ibid., p.166)としている。この考えは、次のような例を念頭に置けば理解されよう。例えば、その人にとって有意義であると考えられている仕事を失うことから生じる空虚は、その人を最終的には自殺へと追い込むかもしれない。しかし、もしその人に子があって、これを育てねばならないという義務を自覚することができたなら、子を育て上げるという意味を再発見することにより、自殺を回避することができるであろう。

ところでティリッヒはこの倫理的不安が中世末期に現れた理由を次のように考えている (ibid., p.169f.)。中世の統一的な社会構造が崩壊して行く中で倫理的不安の出現を齎した要因は、社会の中に現れてきた独立的傾向と絶対主義的な権力の集中、この両者の間の矛盾相克である。一方で、大都市において出現した教養ある中間層は、それまでヒエラルキアによって統制された客観的な教理と sacrament の体系に過ぎなかったものをそれぞれの主体的経験としてもとうとじはじめた。そのことによって彼らは教会との矛盾に駆り立てられていった。他方で、政治的権力が王侯や官僚的軍事的行政機構に集中化され、封建体制における下部組織の独立性が失われていった。このような独立的傾向と絶対主義的傾向の矛盾の中で、不合理的・命令的・絶対的な神のイメージが形成され、それが罪責と断罪の不安を引き起こしたという解釈である。崩壊しつつある中世社会のシステムが孕む矛盾が倫理的不安という形となって現れたということである。

### 心理学的説明と文化論的解釈の関係

それでは不安の心理学的説明と文化論的解釈の関係は如何に考えればよいのか。これについてはメイの不安の規定をもとに考察してみたい。メイによると「不安とは、個人が人格としての自らの存在にとって本質的であると見做している価値が脅かされることによって惹き起こされる気がかり (apprehension) である」( May, 1950, p.205 )。ここで脅かされている価値とは、身体的生命、自由、愛国心、他者からの愛、成功などさまざまである。

人格としての自己の存在と価値はしばしば同一視されるが、これは先のトムの場合によって例証される。即ち、トムは「もし私が家族を養えないようなら、すぐにも埠頭から身を投げてしまうだろう」( ibid., p.85 )と言っていた。彼にとって家族を養えるという彼の存在意義は、彼の存在そのものと同一視されているのである。この点についてティリッヒも同様の理解を示している。人間にとって、精神的脅かしが彼の存在全体に対する脅かしと同じであることを最もよく示す例として、空虚と無意味の絶望 精神的不安の最終的帰結 に耐えるよりは、自分の存在実存を放擲してしまいたいという欲求に駆られることを挙げている。人間であるということは、自己と世界とを含む現実をさまざまな意味や価値に従って理解したり形成したりするということであり、さまざまな意味関係をもっているということである ( Tillich, 1952, p.164f. )。

ところでメイは、自らの存在にとって本質的であると見做される価値は、大いに文化的所産であることを指摘する。ここに、心理学的地平と文化論的地平が交わる場所が存在するのである。例えば、現代文化に支配的であるのは競争による個人的成功である。メイは、「個人的成功が現代人に対して持っている意味は、救済が中世の市民に対して持っている意義とおなじである」というカーディナーの見解を引用している ( May, 1950, p.184 )。競争に勝って成功をおさめることは、自他共にその実力を認めることになるからであり、その意味で経済的評価が即ち人間評価となる。逆に、成功をめざす競争において敗北することは、社会的軽蔑ばかりでなく、自己蔑視や無価値性の感情を惹き起こすことになる。即ち、成功という価値が脅かされる時、現代人は深い不安を経験することになる。また、成功は、他者との厳しい競争によって得られるため、社会内における敵意と対人関係における孤独を増大させることになる。そのため、競争的努力は社会内の敵意を増大させ、そのことが人間関係を孤立させる故に不安を増す。その不安からのがれようと競争はますます激化するという悪循環に陥る。このような競争による個人的成功という価値の重視は、人間にとっての不変的屬性ではなく、歴史的起源と発展を含む文化的所産であるというメイの指摘は重要である。

### 3 不安と「自己 - 対象」構造

#### 不安と対象



恐怖と不安の最も端的な違いは、恐怖が対象 (object) を有するのに対して、不安はそうではないということに存する。メイは、フロイトをはじめ不安に関する研究者に広く認められている共通認識として、この違いを次のように述べている。「不安は散漫な気がかり (a diffuse apprehension) であり、恐怖と不安との主要な相違は、恐怖が特定 (specific) の危険に対する反応であるのに対して、不安ははっきりせず (unspecific)、『ぼんやりしており (vague)』、『対象をもたない (objectless)』ということである。不安に特徴的な性格は危険に直面した時の不確かさ (uncertainty) と無力感 (helplessness) といった感情である」(ibid., p.205)。ティリッヒもまた「恐怖が一定の対象をもつ」のに対して、「不安は対象をもたない」(Tillich, 1952, p.157f.) と述べ、この相違に関しては広く意見の一致が見られるという認識を示している。

しかし不安と恐怖は、それらが現象として区別されるにも拘わらず、実は同じ一つの根を持っているという点に関しても、メイとティリッヒは一致している。まず、メイの見解から見てみよう。メイは、自己の存在および価値を脅かすものに対する反応能力を、その一般的で根本的な形において、不安であるとしている。その上で、不安と恐怖の関係は、不安が基礎的、根源的な反応であるのに対して、恐怖は不安が客観化されて客観化されるに伴い対象が立てられるのであるが、特定の形をとった場合の同じ能力の表現であると理解する。これは神経学的には次のように理解される。生後間もない乳児 (ランディスとハントの観察では、生後一ヶ月) にも、生命の脅かしに対する、情動以前の生得的な反射反応 (startle pattern) が認められる (May, 1950, p.55ff.)。しかしやがて刺激に対し、単なる反射行動ではなく、例えば泣くというような、情動的行動が現れる。漠然とした未分化な情動反応で、これが即ち不安である。さらに成熟するとさまざまな刺激を識別し、危険を客観化することにより、特定の局限された危険に対する分化された情動反応としての恐怖が現れる (ibid., p.220ff.)。それ故、不安の方が根本的 (primal) であり、恐怖の方が派生的 (derived) であると言うことができる (ibid., 224f.)。

他方、ティリッヒも不安と恐怖は区別されるが、その根は一つであり、両者は分かちがたく結びついていることを指摘する。端的な例は死である。死は、それが恐怖である限り、恐怖の具体的な対象が立てられている。即ち、その対象とは、病気とか事故とかによって生命を奪われることや、それに伴う一切の喪失や苦痛など、そのような恐るべき事柄である。他方、死は、それが不安である限り、具体的な対象を持たない。これはティリッヒに従って別様に表現すれば、不安としての死の対象は「絶対に不可知な『死のあと』にあるもの、即ち、無」(Tillich, 1952, p.158) なのである。

現象面からすれば、不安は、ある特殊な状況のもつ脅かしに対処できないでいることの、苦痛に満ちた経験であるが、いかなる特殊な状況における不安もそのなかに人間の状況そのもの

についての不安を含んでいる。すべての恐怖の根底に横たわりそのなかにおける恐るべき要素となっているものは、人間がそれ自身の存在を保持することができないことの不安である。人間はこの恐るべき事実を直視することができず、恐れの対象を立てることにより、不安を恐怖へと変換する。ティリッヒは恐怖に変えられていない不安 それは即ち、常に究極的な無に対する不安なのであるが を「はだかの不安」と呼ぶ (ibid., p.158f.)。ティリッヒの次の言葉は興味深い。「不安は恐怖になろうとする。なぜなら恐怖であれば勇気によって対峙され得るからである。有限な存在は、一瞬たりとも、はだかの不安に耐えることはできないのである。

中略 この(はだかの不安の)恐ろしさは通常、不安を、それが何であれ何かに対する恐怖へと変えることによって、それから逃れられる」(ibid., p.159)(但し、括弧内は筆者による付加)

ここで不安を恐怖へと変換することについて、メイが取り上げているブラウンの症例を見てみたい。ブラウンは、ひどい不安に見舞われる前に、自分がガンになるのではないかというような恐怖を訴えることがしばしばあった。これは彼にとっては現実的な恐怖として現れる。このガン恐怖という心理学的症候の果たす役割は、メイの理解によれば、患者を不安が発生する状況から守ることである。不安の原因はその個人の内的な葛藤であったが、恐怖はこの葛藤を紡ぎだすような状況から患者を保護する。ブラウンの場合、その成長過程において内在化された基本的な葛藤とは、一方で、自律を達成したいという欲求を通せば母親の怒りを免れえず、他方で、母親の庇護の下にある限り自律を達成できないというものであった。この葛藤が基礎となって、そこからブラウンの他者に対する依存的な性格が形成されたのだ。そのような彼にとって、もし自分がガンであるとするならば、彼は病院や医師に対して、罪悪感なしに依存的役割を演ずることが出来るし、また自分の能力を超えと思われる仕事に着手しなければならぬ義務を免れることが出来る。ガンである限り、彼は自律を達成したいにも拘らず、自律的に生きなくてもよいという正当な理由をつけて他者に依存的になることができ、彼にとっての基本的な葛藤が表面化することを避けられるのである。但し、ガン恐怖という心理学的症候と不安が意識されている度合いとは反比例の関係にあり、やがて不安がひどくなり、患者自身その不安を意識するようになると、ガン恐怖は消える。

ティリッヒは、不安を恐怖へと変換させる人間の心理的構造を、カルヴァンの洞察を引用しながら記述している。「カルヴァンがいったように、人間の精神は、絶えざる偶像の工場であるばかりでなく、また絶えざる恐怖の工場でもあって、それはまず第一に神から逃れるため、次に不安から逃れるためであり、両者には関連がある。というのは、真に神である神に直面することは、また絶対的な無の脅かしに直面することでもあるからである」(ibid.)。しかし、恐怖に変えることによって不安を回避しようとする人間のあらゆる試みは成功しないとティリッヒは理解している。「根本的な不安、即ち無の脅かしに対する有限存在の不安は除去され得ない。

それは実存それ自体に属している」(ibid.) からである。そして、「『はだかの不安』が心をとらえた瞬間、それまで恐怖の対象となっていたものは、特定の対象であることをやめる」(ibid.) のである。

### 自己認識の縮小

「不安とは無の実存的自覚である」(ibid., p.157)。これはティリッヒの『生きる勇気』における不安の規定である。不安というものを如何なるものと捉えたときに、そこに無いし非存在ということが立ち現れてくるのか。この問題はメイの採用する心理学的議論からは如何に答えられるであろうか。

「不安とは無の実存的自覚である」というティリッヒの規定を、メイは自己の縮小と関連付けて解釈している。不安はそれが高じると神経症的になるが、不安自体は人間である限りすべての人がもつものである。そのばあいそれをメイは正常な不安と呼び、ティリッヒは実存的不安と呼ぶ。ティリッヒによれば、病的不安とは、特定の条件のもとにおける実存的不安の一つの状態であり (ibid., p.171) それらは同一の根を持つが、それでは、これらの質的な違いはどこに見出されるべきであろうか。それは自己のあり方の相違であり、この点に関してメイとティリッヒの見解は一致している。即ち、神経症的不安の場合は自己の縮小が起きることが特徴である。<sup>(3)</sup> メイによれば、根本的不安が神経症的になるのは、偶然的な事件がそれまでその個人の中に眠っていた内的な葛藤を呼び起こし、これが問題に対する焦点となる (May, 1950, p.210) ときであったが、さらにこの不安が高まるとき自己認識の縮小が起きる (ibid., p.207)。

メイの言う心理学的基礎構造を構成している自己と対象とは相関関係にある。即ち、それらは相関関係にある二つの極として存在するのであり、一方が消滅すれば他方もまた消滅する。<sup>(4)</sup> 一方で、不安を特徴付けるときにしばしば用いられる “diffuse”、“vague”、“undifferentiated” などという言葉は何れも、「自己 - 対象」構造それ自体が脅かされたことにより、対象を明確に立てられなくなっている状態を表現しているものと理解される。他方で、「自己 - 対象」構造が脅かされると、対象に関連させて自己を経験することが出来なくなる。意識は常にある対象に対する意識であり、意識の本質が志向性であることを考えれば、このことは理解されるであろう。

ブラウンの症例においてメイが記述しているところによると、不安時にははっきりとした感情をもつことが困難もしくは不可能となり、不安の度合いが最も強くなると、それは自分自身についての認識の弱まる状態として経験される (ibid., p.249) それは「自己の分解 (dissolution of the self)」として表現される経験である (ibid., p.207) ブラウンは感情が希薄化し、情動

的な空虚さを覚えるようになるとしばしば映画館へ行ったり、小説に熱中しようと試みた。というのは、他者が感じているものを自分も感じる事が出来るならば、その点までは、自分の不安からの救いを見出せたからだという (ibid., p.249)。それは他者の感情に気づき、他者と共感することは、他者と関連させて自らを認識出来るようになることを意味しているからである。即ち他者と共感することにより他者の存在を認識出来るようになると、その限りで自分自身を対象から区別された主体として認識することが出来るようになり、そのことを通して「自己の分解」と表現された状態を克服することが出来るという見通しを、ブラウンが直感的に知っているからだと解釈される。

不安において「自己 - 対象」構造が脅かされるということは、一方では対象が客観的に立てられず、他方では対象と関連付けて自己を経験することが出来なくなるという事態であり、不安が高ずるとそれは「自己の分解」として経験される。メイはこの「自己の分解」という経験こそ、ティリッヒの言う「無の脅かし」であると解釈している。「不安は自己の基盤を脅かすので、不安は我々が自己として存在することをやめるかもしれないという実感として、哲学的レベルで記述される。これはティリッヒによって『無の脅かし』として表現されている」(ibid., p.208)。

## お わ り に

ティリッヒとメイの不安についての思想を付き合わせてみると、それらが如何に親近性を有しているかが理解される。それは彼らの思想の影響関係を、その内容面において示している。しかしメイの思想との対比におけるティリッヒの特徴は、無ないし非存在 (non-being) という概念をその思想の根本に置くことであろう。そのことによって思考は如何なる特徴をもつか。これまでの分析をもとに、その特徴を一つ挙げるとすれば、それは存在論的理論構成に由来する思考の方向性である。

一方のメイの思考 それは心理学的、認識論的であると言えよう では、不安が高じ、「自己 - 対象」構造という安全装置 (システム) が崩壊するところで「自己の分解」(ティリッヒの「無の脅かし」に対応) が生じる。他方のティリッヒの存在論的思考では、無という存在論的概念が前提され、その上で無の脅かしの自覚として不安が理解される。あらゆる具体的な不安を、無の脅かしという地平から解釈するという方向性である。

またティリッヒは倫理的不安が優勢的に現れた原因を中世社会というシステムの崩壊に見ていた。しかしここでもティリッヒの思考の方向性を正確に理解しておく必要がある。彼は社会学的な視点から不安を理解しているのではない。即ち、社会における構造が崩壊することが、それまで不安とは無関係であった人間存在の中に初めて不安を生み出すと考えるのではない。

彼の理解はむしろその逆であって、不安は潜在的に個々の人間存在の内に存在しているのである。それが、社会における諸構造の崩壊に伴って、一般的になることで、その時代特有の不安の形が顕在化してくると理解するのである。ティリッヒの理解によれば、不安とはあくまでも実存的なものであって、その本質は社会構造論的ではなく、存在論的に理解されるべきものなのである。というのは、不安は無の実存的自覚として、たとえそれが顕在化していないときでも、潜在的には存在の中に本質的に含まれているものであると理解されるからである。

無という概念が理論構成に如何なる意義を有しているのか、ないし不可欠であるのか、それは換言すれば、存在論的思考の独自性は何かという問題である。「人間本性の存在論的理解の光のもとでのみ、心理学や社会学の提供する材料は組織的に取り扱われ、首尾一貫した包括的な不安の理論が打ち立てられる」とティリッヒは言う。しかし「不安とは、個人が人格としての自らの存在にとって本質的であると見做している価値が脅かされることによって惹き起こされる気がかり (apprehension) である」としたメイによる不安の規定にも存在の諸次元を総合する試みが見られる。というのは、「個人が人格としての自らの存在にとって本質的であると見做している価値」には、その個人の存在も、精神的価値も、あるいはティリッヒ流に言えば倫理的自己肯定も含めることが出来るとメイは考えるだろうからである。そうであるならば、「人格としての存在にとって本質的である価値」ということが、メイの考えるように、本当に不安の問題の諸次元を総合する射程を持つかということが、さらに吟味されるべき問題であり、またそのような射程を持つとしたら、ティリッヒ流の不安の理解に対する存在論的综合とどのように関係するのか、改めて問われねばならないであろう。

不安は人間存在の諸次元に関わる概念であるため、この概念を巡る両者の理論構成の比較研究は、人間存在を総合的に理解する試みに対して意義のある研究になることが期待されよう。

### “non-being”の訳語についてのコメント

ティリッヒの『生きる勇気』の翻訳者、大木英夫氏は、non-being の訳語に関して次のように述べている。「non-being, Nichtsein = 非存在 以下無と非存在を交換可能な同義訳語とみなし、本訳書では主として無を用い、文脈に応じて非存在とすることもある」(Tillich, 1952a, p.42)。無論 “non-being” の直訳としては、少なくとも単語レベルでは、「非存在」の方が適している。即ち、それは存在という語に否定辞を付すという構造を保持した訳語だからである。しかし、ティリッヒは自らの著作が翻訳されるに際して、翻訳されたものの表現力を重要視したということを考慮するならば、文脈に即して、場合によっては「無」という訳語を選択した大木氏の判断は妥当であると思われる。<sup>(5)</sup> 但し、“non-being”を「非存在」と訳した場合と、「無」と訳した場合とでは、その思想構造において、異なる論理的展開の可能性を意識する必

要がある。

即ち、ティリッヒは存在論の基礎において、非存在の考察が不可欠である旨を述べているが、最終的にはやはり非存在ではなく、存在の方に存在論的優位性を認める議論を展開している。それは第一には彼が神学者としてキリスト教思想の伝統の上に立っているからであり、第二には彼の用いるヨーロッパ語の論理に基づいていると考えられる。

第一は、すべての存在の根源は神の創造性にあるとする理解である。「存在は非存在を、神的な生のプロセスにおいて、永遠に現存しつつしかも永遠に克服されているような仕方で、それ自身の『内に』もっている。存在するあらゆるものの根底は運動や生成を伴わない死せる同一性ではなく、それは生きた創造性である。万物は、それ自身の非存在を永遠的に克服しつつ、創造的にそれ自身を肯定しているのである」(Tillich, 1952, p.156f.)。即ち、ここにおける理解は、第一に存在には運動や生成といった規定が本質的であるということ、第二にそのような存在の根底は創造性であるということ、第三にその場合の創造性とは非存在である可能性を有しつつそれを克服するということにおいて成り立つということ、第四にそのような創造性は神的な生のプロセスに基礎をもっているということ。ティリッヒは当該文脈において創造論をこのように解釈している。

第二は、彼の用いるヨーロッパ語の論理に基づく議論の展開である。「非存在はそれが否定するところの存在に依存している。『依存している』とは二つのことを意味する。第一に、それは非存在に対する存在の存在論的優位性を示している。非存在という語それ自体がこのことを指示しているし、それは論理的に必然的なことである。もし、否定されるべきことに先行する肯定がなければ、否定は不可能であろう」(ibid., p.159)。ここでティリッヒは明らかに彼の用いている言語の構造に基づき、“non-being”を“being”の否定として捉えている。しかし、もし“non-being”を「無」として解釈した場合には、言語構造に基づいて、「無」より「存在」に優位性を認めることが論理的に出来るか否か、これは熟考に値する問題である。というのは、日本語に基づく限り、「無」に対して「存在」と同等の存在論的優位性を与える可能性も、場合によっては「無」の方に存在論的優位性を与える議論の論理的可能性も否定できないからである。

## 註

- (1) 不安の概念に関するティリッヒとメイの親近性の思想史的背景はキルケゴールに求めることが出来る。一方で、ティリッヒが不安の概念を考える際にキルケゴールの思索を意識し、これを踏まえていることは、ティリッヒの次の言葉の中にも見てとれる。「この数十年間、『不安』の語がドイツ語お

よびデンマーク語における Angst に関係づけられてきた。Angst はラテン語の *angustiae* (狭い所) から由来する。キルケゴールによって『不安』は実存主義の一つの中心的な概念となった」(Tillich, 1963, p.43)。他方で、メイも不安の概念に関する思想の歴史的展開を振り返りつつキルケゴールに関して一節を費やし、キルケゴールの先駆性について次のように語っている。「キルケゴールにおいて驚くべきことは、彼の著作が 130 年前のものであるにも拘らず、そして無意識的なものを解釈するための道具を持たなかったにも拘らず そのような道具が最も完全な形において利用可能になったのはフロイト以後に過ぎないのである 彼が不安に対する現代の心理分析的洞察をこれほど鋭敏にかつ深く予期したことである」(May, 1950, p.51)。さらに、ティリッヒとメイの両者がキルケゴールに負っていることとして、ここでは次の一点のみを確認しておきたい。それは本論で述べる「自己認識の縮小」の問題である。正常な不安に対して、神経症的な不安の特徴は、そこにおいて自己認識が縮小することである。この点に関してメイとティリッヒは同じ見解をもっているが、その際両者の見解はキルケゴールの理解と一致している。このことはメイの次の言葉によって確認することができる。「キルケゴールは、彼がこの内的な葛藤を神経症的現象に限定していないということを明らかにしている。 中略 キルケゴールであれば『神経症的』状態と『健康な』状態の相違を次のように叙述するだろう。健全な人は、葛藤があるにも拘らず、自らの自由を実現しつつ前進するのに対して、健康でない人は自らの自由を犠牲にして、『閉じこもった (shut-in)』状態へと縮小する (retrench)」(ibid., p.43)。キルケゴールのいう「閉じこもり (shut-upness)」の状態こそ、神経症的な不安における自己認識の縮小に相当する。

- (2) ここでティリッヒとメイの比較研究の方法について言及しておきたい。ティリッヒとメイの思想の影響に関する因果関係を時系列的に解明することは 勿論、そのような研究がどれだけ有意義であるかは別問題であるが 恐らく不可能であろう。というのは、「はじめに」においても触れたように、彼らは交流を通して互いに思索を深めていったからである。それ故、思想の因果関係というよりは、むしろ思想の内容や構造の比較研究の方がより生産的であろう。そしてその際、両者が影響を受けているキルケゴールを媒介とした比較研究は、彼らの思想の連関のより深い理解にとって重要であると考えられるが、それはこの論文の範囲を超えるため他日を期したい。
- (3) ティリッヒによれば、ノイローゼにおいても自己肯定は存在しているが、そこで肯定されている自己は縮小した (reduced) 自己である (Tillich, 1952, p.171f.)。ノイローゼの人格の場合は、無に対する大きな感受性の故に、それゆえまた深刻な不安の故に、固定された自己肯定にしがみつのである。
- (4) 対象の総体が世界であるから、メイのこの理解はティリッヒの存在の基礎構造である「自己 - 世界」構造の理解と明らかに一致する。但し、メイの場合は主として個人心理学的地平において認識論的に考えられているのに対し、ティリッヒの場合、それは存在論的に考察されている。
- (5) 自らの著作が他国語に翻訳される場合のティリッヒの基本的な考えを、谷口美智雄氏は『組織神学 第二巻』の翻訳にあたって、そのあとがきの中で次のように述べている。「訳に当たっては訳者の日

頃の方針として、日本文としての達意を重視した。訳は原文の語句に拘泥してもいけないし、原文から離れてしまってももちろんいけない、というのが訳者の気持ちであるが、その辺の択選に迷う時、『文章のスピリットを訳してくれ』と語った著者(ティリッヒ)の言葉が訳者を導いてくれた(Tillich, 1963, p.229)(但し、括弧内は筆者による付加)

## 文献

May, Rollo

(1950), *The Meaning of Anxiety* (Revised Edition), W·W·Norton & Company· Inc., 1977

Pauck, Wilhelm and Marion

(1976), 『パウル・ティリッヒ 1 生涯』田丸徳善訳、ヨルダン社、1979年

Tillich, Paul

(1952), *The Courage to Be*, in: Paul Tillich, *Main Works / Hauptwerke 5*. de Gruyter 1988, pp.231-250.

(1952a), ティリッヒ「生きる勇氣」『ティリッヒ著作集 第九巻』大木英夫訳、白水社、1978年

(1963), ティリッヒ『組織神学 第二巻』谷口美智雄訳、新教出版社、1969年

(いまい・なおき 西南学院大学助教授)



